

コロナ禍における早期体験実習 ー オンラインを中心とした看護学実習プログラムとその成果 ー

玉田雅美¹, 澁谷幸², 新澤由佳², 柴田しおり³

¹ 神戸市看護大学大学院博士後期課程, ² 神戸市看護大学, ³ 神戸常盤大学保健科学部

キーワード: COVID-19 感染症, オンライン実習, 看護学実習, 早期体験実習, 看護学生

Early Clinical Exposure in Covid-19 Pandemic : Online-centered Nursing Practicum Program and Outcomes

Masami Tamada¹, Miyuki Shibutani², Yuka Shinsawa², Shiori Shibata³

¹Kobe City College of Nursing Graduate School Doctoral Program, ²Kobe City College of Nursing,

³Kobe Tokiwa University Faculty of Health Sciences

Key Words: COVID-19, Online Practicum, Nursing Practicum, Early Clinical Exposure, Nursing Student

要 旨

新型コロナウイルス感染症の拡大により臨地実習ができず、本学でも実習目標を達成するために基礎看護学実習Ⅰの方法の見直しと検討を行った。本実習は入学早期の1年次6月に行っており、地域住民との交流や病院での見学実習が主な活動であった。2020年度は、オンライン実習4日と学内実習1日で行える活動に変更し、主に「異世代の人への電話インタビュー」「バーチャル病院探索」「COVID-19拡大状況下における看護師の活動:メディア等で発信されている看護師の活動に関する情報の活用」「様々な場における看護師の活動:視聴覚教材の使用」を実施した。

実習終了後の学生による実習評価アンケート(回答率81%)では、多くの学生が各活動は実習内容の理解に役立ったと回答しており、教員の関わりや実習姿勢・実習成果についても高い評価が得られた。実習方法については、グループワークや記録に対する評価は高かったが、活動前の個人学習に関しては約半数の学生が取り組みに難しさを感じていた。自由記述では【病院で実習できない中でも学ぶことができた】【グループワークが有意義だった】【自己学習の内容を確認する時間が足りなかった】【実例がないためレポートが書きづらかった】【オンラインでの活動に向けた準備が難しかった】という意見があった。

バーチャル病院探索は、臨地実習と組み合わせることで、より効果的な学習が可能になると考える。COVID-19感染症は、2023年5月に、感染症法上の位置づけが2類相当から5類感染症に移行され、感染対策が緩和されて通常の実習が可能になりつつある。しかし、実習に関しては、コロナ禍前の実習に単に戻すのではなく、今回の経験を活かしながら、より効果的な実習内容や方法を検討していく必要がある。

I. はじめに

新型コロナウイルス(以下、「COVID-19」とする)の感染拡大により、日本においては2020年2月に新型コロナウイルス感染症対策本部から全国の小中学校と高校に休校要請が出され、2020年4月には緊急事態宣言が発出された。大学においても、卒業式や入学式の縮小・中止、対面授業の中止やオンライン授業の開始等、感染予防を最優先する必要に迫られた。また、看護基礎教育の現場においては、授業だけでなく実習も病院・施設からの学生受け入れ中止により臨地実習ができないという事態に陥っていた。これに対して2020年2月に文部科学省と厚生労働省から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医

療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」(文部科学省, 厚生労働省, 2020)の事務連絡が発表され、「実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいでの実習を行って差し支えないこと、なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」と明記された。そのため、多くの看護師養成機関では、臨地実習をオンラインや学内での学習活動に替えて実施し、様々な工夫を行ってきた(大森, 2022)。

本学では、1年次6月の入学早期に行う基礎看護学実習Ⅰにおいて、地域住民との交流を行い、臨地で病院や

看護師の活動を見学するという学習活動を行っていた。しかし、2020年度は地域住民との対面や病院での実習が行えなくなったため、急遽、学生が実習目標を達成できるよう方法の見直し・検討を行い、自宅やオンラインで実施できる活動に変更した。入学早期の段階に行う看護学実習に関しては、施設や看護活動の見学、患者とのコミュニケーションを行うことが多く、その学修効果としては、対象者理解、看護の役割理解、看護職が働く場の理解などが報告されている（藤代, 2016）。また、学生にとって初めての臨地実習となるため、学生のもつ看護への関心や動機づけが高まる実習といわれている（水戸, 2013）。これまでに報告されたコロナ禍での代替実習の多くは、1年次後期以降に実施された実習で患者理解や看護過程の理解に焦点を当てたものであり、入学早期の段階で行われる看護学実習に関する報告はほとんどみられない。

そのため、本稿ではCOVID-19感染症拡大のなか、入学早期にオンラインで実施した基礎看護学実習Ⅰの内容、方法および学生の反応について報告する。本実習について報告することは、入学早期に実施する看護学実習においても、臨地以外で学習できる内容や方法を提示することとなり、今後の実習を検討していくうえでの資料になると考える。

Ⅱ. 基礎看護学実習Ⅰの概要

本学の基礎看護学実習Ⅱは、1年次前期（6月）に開講していた1単位の実習科目であり、2年次後期（9月）の基礎看護学実習Ⅱ（2単位）と合わせて基礎看護学分野の臨地実習として構成されていた。基礎看護学実習Ⅱでは、入院患者を受け持ち、看護過程を展開する。基礎看護学実習Ⅱは、地域の人々の生活および病院での療養生活について知ること、看護師がどのような実践を行っているのかを知り、人々の生活環境と看護について考察することを目的としており、学生にとっては初めての病院実習である。

実習目標は表1に示すとおり、1)～5)の5つ設定し、看護の対象となる人の理解や患者が療養している環境の理解を促し、看護を学ぶ者としての課題を明確にすることとしている。COVID-19感染症拡大前の従来の実習では、2～3日目に2施設に分かれて病院実習を行い、4日目は地域住民との交流、最終日は学内で実習のまとめと振り返りを行った（表2）。

表1. 基礎看護学実習Ⅰの実習目的・実習目標

| I. 実習目的 |
|---|
| 地域の人々の生活および病院での療養生活について知る。さらに、看護師がどのような実践を行っているのかを知り、人々の生活環境と看護について考察する。 |
| II. 実習目標 |
| 1. 地域の人々と交流し、地域での暮らしが理解できる。 2. 病院設備を見学し、療養環境について理解できる。 3. 看護師がどのような活動を行っているのかを知る。 4. 実践の場で学ぶためにふさわしい態度で活動する。 5. 看護学を学ぶ上での自己の学習課題を明確にする。 |

表2. 従来の基礎看護学実習Ⅰの活動内容と方法

| | 活動内容 |
|-----|--|
| 1日目 | ＜学内実習＞ ・施設の特徴や各部門の一般的な役割について調べ、病院実習で見聞きたい内容、理解を深めたい内容を明確にする。 ・地域住民との交流で、どのようなことを知りたいのか、どのように交流したいかを明確にする。 |
| 2日目 | ＜病院実習＞ ・看護部からの挨拶・看護部の説明を聞く。 ・院内見学：病院内をグループで見学する。 ・グループワークをする。 |
| 3日目 | ＜病院実習＞ ・病棟の見学：病棟・病室を見学し設備等について説明を聞く。 ・看護活動の見学：病棟看護師の活動に同行し、患者の病室環境や看護師の活動を見学する。 ・他部門の見学：他部門を訪問見学し説明を聞く。 |
| 4日目 | ＜学内実習＞ ・地域住民との交流：地域住民と交流し、地域の人々の暮らしや健康に関する考え方について話を聞く。 ・グループワーク：各活動で見聞きた内容や体験したことをグループで共有し、考えや学びを整理する。 |
| 5日目 | ＜学内実習＞ ・カンファレンス・まとめ：実習体験を言語化し、個々の体験した内容を共有する事によって学習を深め、視野を広げる。 |

Ⅲ. コロナ禍における基礎看護学実習Ⅰ

1. 実習方法・内容決定までの経過

2020年度の基礎看護学実習Ⅰは6月1日から5日間の実習であり、教員はこの実施に向けて準備を進めていた。しかし、2020年1月に国内で初のCOVID-19感染症例が報告されてから、4月には神戸市に緊急事態宣言が発令され、2020年度前期（4～9月）の授業及び臨地実習は、原則、オンラインでの実施となった。この時期は感

染症流行の初期であったため、本学でも4月の時点では学内への登校が禁止となり、授業はすべてオンラインとなった。その後、5月には学年ごとの分散登校が可能となり基礎看護学実習を履修する学生も、週1回の登校が可能となったが、実習開始の6月1日もこの状態が継続される可能性が濃厚であった。つまり、週に1日の登校日で1学年95名全員が実習目標を達成できる教育方法への転換が急遽求められたのである。教員は、これを実現するための実習内容や方法を模索し検討を行った。

さらに、2020年度の1年生は、入学式に登校しただけ、その後はオンライン授業を受けており、本実習における登

校日が、入学後初めての大学での授業であった。学生にとっては、初めての教室、初めて対面する同級生や教員という、慣れない環境での学習となることに加え、感染予防対策も講じる必要があった。

2. 実習方法と内容

当初予定していた、臨地での活動を含めた5日間の実習をオンライン4日と学内実習1日に切り替えるため、活動内容を表3のように変更した。学生は1グループ7～8名で実習を行い、教員は1名につき2グループを担当した。ここでは、主な活動について述べていく。

表3. 2020年度の基礎看護学実習Ⅰの活動内容と方法

| 内容・方法 | 学習形式 |
|--|---------------------|
| 活動1：異世代の人への電話インタビュー 身近な異世代のひとに電話でインタビューし、暮らし方や考え方、健康に対する気持ちなどを聞き、違いを知る。 | |
| 1) 自分と世代の異なる一緒に住んでいない人（父母兄弟以外）で電話インタビューに応じてもらえる人を探す | |
| 2) 他者の暮らし方や考え方、健康に対する価値観などを知るために何を尋ねるとよいのかを考え、質問内容を考える。 | 個人学習 |
| 3) 2) を元にインタビューガイドを作成する。 | オンラインによる GW |
| 4) インタビューガイドをもとに各自で電話インタビュー | 個人学習 |
| 5) 実施した課題をもとにグループで共有し、異世代の人と自分たちとの違いについて整理する。 | オンラインによる GW |
| 活動2：バーチャル病院探索 提示された事例患者になったつもりで、病院に来院したと仮定して、各病院ホームページを閲覧して病院環境や機能、さまざまな職種について学習する。 | |
| 1) 事例患者を読み、わからないことについて調べて明確にする。調べて不明な点はオンライン実習で質問する。 | 個人学習 オンラインによる GW |
| 2) 各自で「バーチャル病院探索」実施 課題用紙に提示された、患者の受診行動通りにホームページ上の病院マップ、部署紹介ページに行き、訪問場所ごとに出されたクイズに答えながら学習を進める。 | 個人学習 |
| 3) 実施内容をグループで共有し、患者や利用者にとって使いやすく安全な設備などについて整理する。 | オンラインによる GW |
| 活動3-①：新型コロナウイルス感染拡大状況下における看護師の活動からの学び メディア等で紹介されている情報から、新型コロナウイルス感染拡大下において、看護師がどのような活動を行っているのかを学習する。 | |
| 1) メディア等で流されているさまざまな情報から、看護師の活動について取り上げ、考えたこと感じたことを記載する。 | 個人学習 |
| 2) 1) についてグループで報告し、わかったこと感じたことを共有する。 | オンラインによる GW |
| 活動3-②：様々な場における看護師の活動を知る 視聴覚教材を視聴し、看護師がどこでどのように活動しているのかを学習する。 | |
| 1) 視覚教材を視聴し、新たに知った看護師の活動や印象に残ったことなどについて記録し、その場面から感じたことや考えたことを整理する。 | 学内実習 |
| 2) 1) についてグループで共有する。 | |
| 活動4：看護学生であることを自覚し活動する 実習全体を通して、健康管理に留意し、人とかかわる上でのマナーを学ぶ。 | |
| 1) 自己の健康状態をモニターし健康的な生活習慣を身につける。 | |
| 2) 人とかかわる際に必要な社会的マナーを学ぶ。 | |
| 活動5：活動1～4を通して学んだことをグループで共有し、現在の自分の夢、希望を明確にする。 これまでの学習過程からの学びや困難点などを共有し、これからどのようなことを学びたいか、自分の課題は何かなどをグループで話し合うことを通して、各自の学習を整理し、自分なりの学習目標を明確にする。 | 学内実習 個人学習 |

活動1：異世代の人への電話インタビュー

通常の実習では、実習目標1「地域の人々と交流し、地域での暮らしが理解できる」を達成するために、地域住民に大学に来て頂き、地域で暮らす人々の生活習慣や健康に関する考え方について、学生が直接話を伺っていた。しかし、地域住民に直接会って話をする事ができず、地域住民の方々とオンラインで交流するという体制もまだ整っていなかった。そのため、学生の身近にいる異世代のひとに電話でインタビューを行い、暮らし方や考え方、健康に対する気持ち等について自分たちとの違いを知る、という方法に変更した。

学生には、父母兄弟以外で自分と世代の異なる一緒に住んでいない人、なおかつ電話インタビューに応じてもらえる人を実習開始までに探しておくよう説明した。実習では、個人学習やオンラインでのグループワークを通して、電話で質問する時の尋ね方や留意点を考え、インタビューガイドを作成した。そして、各自がインタビューを行った後、実施した結果や学び、課題をオンラインで共有した。

活動2：バーチャル病院探索

実習目標2「病院設備を見学し、療養環境について理解できる」に対しては、通常実習では、学生が病院に出向いて院内を見学したり、看護部や他職種からの説明を聞いたりする中で理解を深めていた。今回の実習では、病院での活動ができない中、どのような学習活動によってそれが代替できるのかを模索し、バーチャル病院探索を実施することにした。

これは、高校生Aくんが学校でけがをして病院を受診し、検査や診察後に入院となって病院のベッドで休むまでの過程をストーリーにしたもの(表4)で、教員が実習病院のホームページの情報をもとに病院内の設備や機能を学べるようにした。具体的には、Aくんが病院内を歩く先々に病院の設備機能の理解や、各部門・職種の理解に関連するクイズを設定し、学生はそれに回答していくというものである。さらに、クイズは、「Aくんは、車椅子で1階のMRIに向かいます。どんなルートで行くと、Aくんの負担が少ないでしょうか」といったように、学生が患者・家族の視点で考えられるような問いかけとした(図1)。学生は、患者であるAくんになったつもりで、ワークシートに提示された場所を病院のホームページから検索し情報を得ることで、クイズに答え、病院環境や機能、病院で働いている様々な職種について

学習していった。その後オンラインでのグループワークで学習成果を共有し気づきや学びを整理した。

表4. バーチャル病院探索の手引き

| <学習方法> |
|--|
| <p>1. あなたは、Aくんとして病院を受診することになりました。</p> <p>Aくんは部活中、左膝に激痛が走り、倒れてしまいました。近くの整形外科を受診すると、前十字靭帯断裂と診断され、〇〇病院を紹介受診することになりました。部活の副顧問の先生に付き添われて、紹介状とレントゲンのCDを持って、タクシーで病院に行きます。</p> |
| <p>2. ワークシートの「できごと」を読んで、病院に到着してからのAくんの体験を想像しながら「考えてみよう」に答えていきましょう。病院のHPを探索する過程で、疑問に思ったことや気付いたこと等はMEMOに残しておきましょう。</p> |

活動3-①：COVID-19拡大状況下における看護師の活動

通常の実習では、目標3「看護師がどのように看護活動を行っているのかを知る」の達成のために、病院で看護師の活動に同行していた。この学習活動に代わる学習として、COVID-19感染症の流行により、医療者の活動がテレビやインターネットなどを通して世の中に発信される機会が増えていることに着目し、その看護師たちがどのようにして社会の期待に応え、役割を果たし活動しているのかを知ることにした。具体的には、メディア等で発信されている様々な情報から、看護職の活動に関係するものを収集し、その内容を記載すること、そこから考えたこと、学んだことを記載していくことである。これは自宅での自己学習で取り組み、オンラインでのグループワークで報告し、お互いに感じたことや学びを共有した。

活動3-②：様々な場における看護師の活動

目標3達成に向けて、COVID-19感染症対応以外の看護師の活動を学ぶ内容として、看護師の活動を紹介しているテレビ番組の視聴を行った。この番組は、病院の外来や病棟だけでなく、手術室や診療所、ドクターヘリで働く看護師の活動の一部を紹介し、合わせて、看護師の言葉や行動の意図も説明されている。学生は、実習最終日の登校日にこの教材を視聴し、新たに知った看護師の活動や印象に残ったことなどを各自で記録した。その後、各グループに分かれてその内容を共有し、学びを深めた。

| 学籍番号 () 氏名 () | | | |
|-----------------|---|--|------|
| | できごと | 考えてみよう | MEMO |
| 来 院 | <p>タクシーで〇〇病院に到着しました。中に入ると、1F のエントランスです。</p> <p>どこに行けばいいんだろう？ 足も痛いし、あまりウロウロする余裕はなさそうです。エントランスで立ち尽くしていると、胸にボランティアと書かれたエプロンをつけた人が声をかけてくれました。A 君は、ボランティアさんに助けてもらえてありがたい！ と思いながらも、病院にボランティアさんって居るんだ…と思いました。</p> <p>A 君が事情を説明すると、一緒に目的地まで行ってくれるようです。ボランティアさんは、「足痛いよね？ 車椅子を持ってくるから、ちょっと待ってて。」と、どこかに行っていました。A 君は近くの椅子に座って待つことにしました。</p> | <p>① 初めて病院を受診する患者さんは、まずどこに行けば良いのでしょうか？</p> <p>② なぜ、病院にボランティアさんがいるのでしょうか？ 病院のボランティアさんは、他にどこで、どのようなことをしているのでしょうか？</p> <p>③ 車椅子は、院内のどこに配置されていますか？</p> <p>④ 車いすは、なぜそこに配置されているのでしょうか？</p> | |

図 1. パーチャル病院探索のワークシート 〇〇病院（一部抜粋）

3. 学生の实習に対する評価

本学では各実習の終了直後に学生による実習評価アンケートを行っている。2020 年度の基礎看護学実習Ⅰのアンケートは、実習直後の 6 月に、オンラインでのアンケート機能を用いて実施した。アンケートの項目は、①各活動による実習内容の理解に関する設問 6 項目、②実習方法に関する設問 9 項目、③教員の関わりに関する設問 3 項目、④実習姿勢および実習成果に関する設問 4 項目の合計 22 項目とした。各項目については 5 段階評価（そう思う・ややそう思う・どちらともいえない・あまりそうは思わない・そうは思わない）で求め、さらに、気づきや意見を自由記述で求めた。

4. 倫理的配慮

実習評価アンケートの結果を本報告で使用するにあたり、2020 年度に基礎看護学実習Ⅰを履修し、すでに単位認定された学生 95 名に、説明書を配布して口頭で説明を行った。説明書には、基礎看護学実習Ⅰの実習評価アンケートを本報告に使用すること、無記名であり個人は特定されないこと、協力の可否は任意であること、本実習の

成績評価は終了しており協力の可否が今後の授業の成績や大学生活などに一切影響しないこと、データを利用してほしくない場合の対応について等を記載した。また、実習評価アンケートの使用にあたっては、神戸市看護大学倫理委員会の承認を得た（承認番号：第 2112304 号）。

5. 実習評価アンケートの結果

対象の学生 95 名中 77 名が回答し、回答率は 81.0% であった。実習評価アンケートから得られた回答結果のうち、数値データは記述統計により分析を行った。その結果は図 2 に示す通りである。自由記述は、意味内容の類似性、相違性をもとに分類した。その結果、11 サブカテゴリー、5 カテゴリーが抽出された（表 5）。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを＜＞で示す。

1) 各活動による実習内容の理解について

各活動が実習内容の理解に役立ったかを問う 6 項目（No.1 ～ 6）については、すべてにおいて 85% 以上の学生が、「そう思う」「ややそう思う」と回答した。その割合が特に高かったのが、「6. 視聴覚教材は看護師の活動

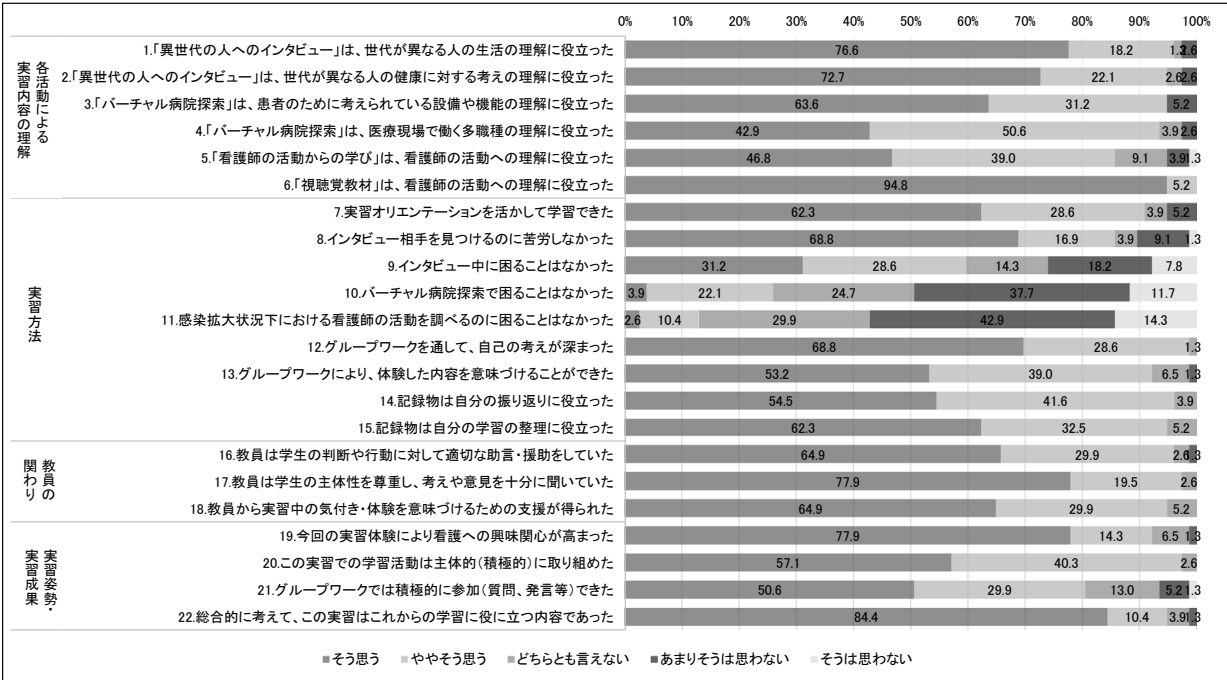


図 2. 実習評価アンケート (n=77)

表 5. 実習評価アンケート (自由記述)

| カテゴリー | サブカテゴリー | 代表的な記述 |
|-----------------------|-----------------------------|---|
| 病院で実習できない中でも学ぶことができた | 病院で実習できない中でも多くの事を楽しく学べた | ・病院に直接は行けなかったが、先生が考えた実習内容でグループワークを行い、おもしろかったし楽しかった。 ・始めは、実習の代わりになるものとはどんなものなのか、と少し不安だったが、実習を終えてみて、多くの学びができたので、かなり満足している。 |
| | 病院、看護師、人間の理解を深めることができた | ・今回の実習でさまざまな人間についての理解や、病院の機能、看護師の仕事についての理解がより深まった。 |
| | 臨地実習では見られない場所を知ることができた | ・実際に病院で行う実習では見ることでできない手術室の中を見られたため、コロナの影響でこの形態になってしまったことに、特に問題を感じていない。 |
| グループワークが有意義だった | グループワークは他者の意見を聞くことができ有意義だった | ・グループワークが多く、他の人の意見をたくさん聞くことができたのでとても有意義だった。 |
| | オンラインよりも対面の方がよい話し合いができた | ・対面時のグループワークは話しやすく、オンラインよりも内容が濃かった。 ・(入学後)初めて対面で話し合うことができ、より自分の意見も表現しやすくなり、相手の意見も聞きやすくなった。 |
| | メンバーと仲良くなりこの大学で頑張ろうと思えた | ・メンバーとも仲良くなれたので、これからの大学生活への不安が和らいだ。 ・7人と仲が深まったことが大きな収穫である。これからもこの大学で頑張って学んでいこうと思えた。 |
| 自己学習の内容を確認する時間が足りなかった | 自己学習の内容を確認する時間が足りなかった | ・自己学習で出された問題について、答え合わせの時間や先生の考えを知ることができる時間がもう少しほしかった。 |
| 実例がないためレポートが書きづらかった | 実例がないためレポートが書きづらかった | ・実際に病院に行っておらず、実例がないため、最終レポートは無理やり繋げた感じがしている。 |
| オンラインでの活動に向けた準備が難しかった | 看護師の活動を調べるのが難しかった | ・看護師の活動を新聞で調べていたので情報収集が困難だった。 |
| | バーチャル病院探索の内容を調べるのが難しかった | ・インターネットから調べるが大変だと感じた ・バーチャル病院検索はもう少しヒントがあれば助かった。 |
| | 初対面の人といきなり意見交換をするのが大変だった | ・実習が始まるまで話したことのない人と、いきなり意見交換やディスカッションを行わなければならないため、名前と顔を一致させたりしながら活動を行うことが大変だった。 |

への理解に役立った」であり、「そう思う」のみで 94.8%、「ややそう思う」を合わせると 100%であった。その他、「異世代の人へのインタビュー」に関する 2 項目、「バーチャル病院探索」に関する 2 項目についても 90%以上の学生が役立ったと回答している。

また、学生は各活動を通して＜病院で実習できない中でも多くの事を楽しく学べた＞＜病院、看護師、人間の理解を深めることができた＞と感じていた。さらには、視聴覚教材で手術室等の紹介があったことから、＜臨地実習では見られない場所を知ることができた＞という意見もあり、【病院で実習できない中でも学ぶことができた】と感じていた。

2) 実習方法について

実習方法に関する項目 (No.7 ~ 15) のうち、グループワークに関しては「12. 自己の考えが深まった」97.4%、「13. 体験した内容を意味づけることができた」92.2%と「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が 9 割を超えていた。自由記述においても＜グループワークは他者の意見を知ることができ有意義だった＞＜オンラインよりも対面の方がよい話し合いができた＞とグループワークの効果を実感していた。さらに、グループワークを通して＜メンバーと仲良くなりこの大学で頑張ろうと思えた＞と、【グループワークが有意義だった】と捉えていた。また、記録物についても、「14. 自分の振り返りに役立った」「15. 自分の学習の整理に役立った」の設問に対して、「そう思う」「ややそう思う」の回答が 95%を超えていた。しかし、自由記述では実際に病院での体験がなかったことから【実例がないためレポートが書きづらかった】という意見もあった。

実習方法に関する項目の中でも、「11. 感染拡大状況下における看護師の活動を調べるのに困ることはなかった」の問いに対しては、「そう思う」「ややそう思う」は 13.0%にとどまり、「あまりそうは思わない」「そうは思わない」と回答した学生が 57.2%と半数を超えていた。さらに、この項目以外にも「あまりそうは思わない」「そうは思わない」と回答した割合が高かった項目は、「10. バーチャル病院探索で困ることはなかった」49.4%、「9. インタビュー中に困ることはなかった」26.0%であった。自由記述においても、＜看護師の活動を調べるのが難しかった＞＜バーチャル病院探索の内容を調べるのが難しかった＞という意見があり、自己学習として取り組んだ内容が難しいと感じていた学生もいた。さらには、＜初対面の人といきなり意見交換をする

のが大変だった＞と【オンラインでの活動に向けた準備が難しかった】と感じていた。

3) 教員の関わりについて

教員の関わり (No.16 ~ 18) については、「教員は学生の判断や行動に対して適切な助言・援助をしていた」「教員は学生の主体性を尊重し、考えや意見を十分に聞いていた」「教員から実習中の気づき・体験を意味づけるための支援が得られた」の 3 項目すべてにおいて 95%以上が「そう思う」「ややそう思う」と回答していた。

4) 実習姿勢および実習成果について

実習姿勢に関する 2 項目 (No.20, 21) については、「この実習での学習活動は主体的に取り組めた」97.4%、「グループワークでは積極的に参加できた」80.5%であった。また、実習成果に関する 2 項目 (No.19, 22) は、「今回の実習体験により看護への興味関心が高まった」92.2%、「総合的に考えて、この実習はこれからの学習に役に立つ内容であった」94.8%であった。

Ⅳ. 考察

1. バーチャル病院探索の活用

活動 2「バーチャル病院探索」は、多くの学生が病院の設備・機能や他職種の活動を理解するのに役立ったと評価していた。総合病院を訪れた経験がない学生もいたが、ワークシートを作成する際に、初めて目にする病院の中をスムーズに探索できるよう患者が受診するときの流れで訪問場所を組み立てたこと、患者・家族にとっての利便性の視点で病院環境について考えられるように患者や家族のもつ疑問をクイズにしたことが効果的に働いたと考える。早期体験実習はこれまでも、病院や施設の構造やシステムなどについての学びが報告されており (藤代, 2016)、オンライン中心となった今回の実習においても同様の学びができたと考える。しかし、文部科学省の報告書 (2021) で「臨地でしか学ぶことのできない内容の具体として、人間の五感を通してキャッチされる臭いや、その場の空気感といったシミュレーションでは再現困難な感覚がある」と述べられているように、今回は学生が病院という環境に身を置いて、実際の病院の広さや明るさ等を感じ取り、病院に居る患者・家族や医療者の様子を見て学ぶということではできなかった。

臨地での実習の学修効果を最大にするためにも臨地実習と事前・事後学修の内容を整理して組み立てていくことは重要であり（文部科学省, 2021）、今後、臨地実習が再開された際には、本活動のような学習内容をどのように学内での活動と組み合わせる実施していくと、学生の学びを深めることができるのかを検討する必要がある。

また、実習評価アンケートでは約半数の学生が「バーチャル病院探索で困ることがあった」と回答しており、自由記述でも「バーチャル病院探索の内容を調べるのが難しかった」という意見があった。バーチャル病院探索は、まず個人で課題に取り組み、その後、オンラインでのグループワークで学びを共有するという流れであった。COVID-19 感染症対策の一環で、多くの病院がインターンシップに代わる病院紹介として地図アプリを活用した院内見学システムを取り入れるようになった。しかし、本実習開講時にはまだそのような機能が十分に整備されておらず、学生はホームページに掲載された院内マップと部門部署ごとの紹介記事を頼りに院内の様子を想像するしかなかった。そのため、学生はホームページに掲載されている多くの情報の中から求められる情報を見つけ出すことに難しさを感じたものと思われる。さらに、それらが自宅での個人学習であったことや、気軽に相談できる学生同士の関係性がほとんどできていなかったことも影響していたと考える。入学間もない学生がオンライン学習になった際には、個人学習で生じた疑問や困難をどのように同級生と相談したり、共有したりしていくのかといった方略を明確にしておくことが必要である。

2. 看護活動の理解

看護活動の理解について学ぶ2種類の活動についても、多くの学生が役立ったと回答していた。特に、活動3-②「様々な場における看護師の活動」で使用した視聴覚教材については、全ての学生が役立ったと回答していた。これは、学生が視聴覚教材を通して、看護師の活動の場が多様であることや、手術室・ドクターヘリなど通常では見られない場を知ることができたためだと考える。また、視聴覚教材では看護師の言動の意図が説明されており、看護を学び始めた学生にも理解しやすかったことも影響していたと思われる。

しかし、バーチャル病院探索と同様に、臨地で実習できなかったことによる影響もある。藤野（2021）は、学生は短時間であっても患者中心に動いている現場に身を置く

ことで、看護師の動きや患者ケアとその反応を見て看護の力を感じることができたと述べている。さらに、臨地実習でしか学べない、学内実習を工夫して設計しても経験できないものとして、看護の対象者と直接かかわり療養環境の実際を知ることや、さまざまな状況が動く現場における看護職の活動を体感することなどを挙げている（藤野, 2021）。COVID-19 感染症流行前の早期体験実習に関する先行研究では、学生が、看護師と患者のやりとりを見学することで、＜患者とのコミュニケーションにおける工夫＞や＜一人一人の患者に個別に対応する大切さ＞＜患者の意志を大切にする姿勢＞など【看護ケアの具体化】を学んでいたと報告されている（伊藤, 2009）。このように、学生が看護師の具体的な活動を体感して学びにつなげることができたのは、臨床現場に身を置いていたからだと考える。しかし、今回の実習では患者と関わるができなかったため、学生が看護師の活動を体感し、看護ケアの具体を十分に学ぶことは難しかったと思われる。

早期体験実習は、学生が入学早期の段階で、病院などの医療現場での直接的体験を通じて、医師等を目指す動機付け、使命感を体得させることなどを目的として導入され、カリキュラムや教育方法の改善がなされてきた（文部科学省, 1995）。看護学生を対象とした先行研究では、看護師になりたいという思いを高めることや、困難感から得た学びを達成するための新たな目標を設定するきっかけになることが明らかになっており（相撲, 2016）、見学が主体となる学習形態であっても、看護学生の学習意欲を高め、将来の展望などを考える契機となる重要な位置づけにあるといわれている（早川, 2016）。本実習を履修した学生は、期待と緊張を抱いて臨んだ初めての实習が、オンラインと学内実習に変更になったことで、落胆や不安な感情が大きくなるのではないかと懸念が教員にはあった。しかし、アンケートでは、9割以上の学生が「今回の実習体験により看護への関心が高まった」「これからの学習に役立つ内容であった」と回答していた。臨床での直接的な体験ができず、上記で述べたような、自らが体験した困難から学びを得たり、将来の展望を考えるには至らなかったものの、今回の活動を通して看護への関心が高まり、今後の学習に繋げていくことはできたと考える。

今回、コロナ禍といったこれまで経験したことのない状況の中で、教員は実施可能な活動を考案し、試行錯誤を繰り返しながら、できる限りの実習環境を整えてきた。学生た

ちも戸惑いつつも、今できることを考え主体的に実習に取り組んでいた。これまでは、臨地で実習することが当たり前であったことで、臨地実習でなければ学べないことは何かを議論したり、実習目標を達成するための学内学習の工夫について考える機会もなかった。現在も COVID-19 の影響を受けてはいるが、多くの施設で実習が可能になりつつある。入学早期に臨地実習を行うことの意義を鑑みると、やはり短時間であっても臨地で看護師の活動を見学できる機会があることは、看護を学び始めた学生にとって重要である。しかし、以前と同じように実習を行うのではなく、コロナ禍で得た経験を活かし、今後も臨地実習でしか学べないことは何かを十分に精査し、学内授業や実習の目標、内容、方法を検討し設計する必要があると考える。

V. まとめ

COVID-19 感染症が拡大する中、本学では基礎看護学実習Iをオンライン4日、学内1日で実施できるよう変更した。主な活動は、「異世代の人への電話インタビュー」「バーチャル病院探索」「看護師の活動（メディア等で発信されている看護師の活動に関する情報の活用・視聴覚教材の使用）」であった。実習評価アンケートでは、多くの学生がどの活動も学習内容を理解するのに役立ったと回答していたが、個人学習への取り組みに難しさも感じていた。バーチャル病院探索は、今後も臨地実習と組み合わせることで、より効果的な学習が可能になると考える。

COVID-19 感染症に対しては、感染症法上の位置づけが2類相当から5類感染症に移行となり、感染対策も緩和されて通常の実習が可能になりつつある。しかし、実習に関しては、コロナ禍前の実習に戻すのではなく、今回の経験を活かしながら、より効果的な実習内容や方法を検討していく必要がある。

本報告において申告すべきCOIはない。

文献

藤野ユリ子 (2021). with/after コロナのシミュレーション教育の展望. 看護, 73 (10), 64-69.
藤代知美, 小林淳子, 渡部光恵 (2016). 看護学教育における早期体験実習での学習内容に関する文献レビュー. 四国大学紀要, (A) 46, 183-189.

早川真奈美, 古田雅俊, 中村恵子 (2016). 早期体験実習の意義に関する文献検討. 中京学院大学看護学部紀要, 6 (1), 49-62.

伊藤朗子, 中岡亜希子, 岡崎寿美子他 (2009). 早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討. 千里金蘭大学紀要, 6, 63-72.

文部科学省 (1995). 我が国の文教施策 第2部 第4章 第3節 1 医・歯・薬学教育の改善・充実. 検索月日 2023年4月10日,

https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/hpad199501_2_141.html.

文部科学省, 厚生労働省 (2020). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について. 検索月日 2023年3月20日,

https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf.

文部科学省 (2021). 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨床実習の有り方に関する有識者会議 報告書. 検索月日 2023年3月30日,

https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf.

水戸優子, 加納佳代子 (2013). 「基礎看護学」において初めて看護に接する学生に伝えることは?. 看護教育, 54 (2), 76-82.

大森美保 (2022). コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討. 帝京科学大学紀要, 18, 57-164.

相撲佐希子 (2016). 1年次前期の基礎看護学実習が初期学生の「学び」と職業に対する「思い」に及ぼす影響, 愛知きわみ看護短期大学, 16 (1), 41-46.